2011.06

ヨシでびわ湖を守る ネットワーク通信

VOL. 10

2011.5月末　伊庭内湖のヨシ原

さわやかな風にたなびくヨシは早くも人の背丈ほどに成長しています。
ヨシ原の中では、野鳥たちの巣作りがはじまろうとしています。

まめちしき

びわ湖の外来魚といえばブラックバスやブルーギルがみなさんも頭に浮かんでくることでしょう。

あまり知られていませんが、1960年代にブルーギルが先にびわ湖に浸入したそうです。
その後遅れてブラックバスの一種のオオクチバスが発見され1980年代後半に激増したそうです。
県では、2002年より外来魚駆除対策が強化され、これらの外来魚の駆除量はここ数年、毎年400～500トン捕獲され年々減少傾向にあるそうですが、未だにびわ湖に生息する外来魚は約1400トンと県では推定されています。

私達も、外来魚の駆除のため釣り大会に協力し、びわ湖固有の在来種保護に努めて行きたいです。

びわ湖を知る■問題

びわ湖周辺には現在いくつの内湖が残っているでしょうか。

① 23内湖　② 13内湖
③ 30内湖　④ 41内湖

特集
1ページ

近江ウエットランド研究会会員
森　小夜子 様より

琵琶湖周辺のヨシ原について

『ヨシの花』

【原風景として】

滋賀県は西日本でも有数の面積を誇るヨシ原を有していますが、ヨシはサクラやシャクナゲのように美しい花びらを持たないため、開花しても花を鑑賞されることはありません。しかし、テレビなどで琵琶湖の映像が流れるとき、その壮大なヨシ原は四季折々その風景に華を添え、自然の美しさをより一層引き立たせてくれる植物です。

【ヨシ原の変遷】

食糧増産のための農地開拓による内湖の干拓、巨大な堤防（湖周道路）や緑地公園の整備など、琵琶湖周辺のヨシ原は時代ともに減少しました。
さらにヨシズや屋根材などへの需要の減少に伴い、ヨシを生業とする人々が激減、ますますヨシと人の関係は希薄になっていきました。
その一方で、開発にともない人が近づけなかった湖岸やヨシ原に目が向けられるようになると、ヨシ原は多くの生き物を育み水質浄化や湖岸の保全など、計り知れない役割を果たしていることが徐々に明らかになってきました。
その結果1992年、全国初の「ヨシ群落保全条例」が制定され、琵琶湖をはじめとする生態系の健全な回復をめざして、ヨシと人の新たな関わりがはじまりました。

『近江八幡市　篠田神社の火祭り』

【ヨシ原の湿地性植物】

琵琶湖や内湖の水位は年間を通して管理されていますが（＋30・－20cm）、大雨や渇水時にはさらなる水位変動が生じるため、隣接するヨシ原は人が容易に踏み込めない所です。この不安定な湿地に目をやると、一見ヨシだけが生育しているように見えますが、実はそうではありません。

『コバノカモメヅル』＊

『カキツバタ』＊

『サデクサ』＊

特集
2ページ

水辺の抽水地帯にはウキヤガラ、カンガレイ、マコモが、陸地の湿潤地帯にはイヌゴマ、オギ、カサスゲ、クサヨシ、クサレダマ＊、コバノカモメヅル＊、シロネ、カキツバタ＊、ハンゲショウ、ヒメナミキ＊などをはじめとする、人の背丈より低い植物が大型植物であるヨシ群落の中で上手く生活しているのです。
＊印は「滋賀県で大切にすべき野生生物」（2005年改訂版）に記載された保護すべき植物です。とりわけ、オニナルコスゲ＊、オオマルバノホロシ＊、ツルスゲ＊、タコノアシ＊、ノウルシ＊は県内では琵琶湖周辺のヨシ原でしか見られない大変希少な植物です。
ヨシ原はこのような豊かな生物相を育みながら、希少な生き物を絶滅の危機から守っているのです。

『クサレダマ』＊

『オニナルコスゲ』＊

『オオマルバノホロシ』＊

『タコノアシ』＊

【新たな試練】

ヨシ条例やラムサール条約湿地の拡大（2008 年）など、ヨシ群落は安泰かに見えましたが、冬になると抽水域のヨシは株元に荒波を受けて弱ってしまいます。また、保全という名のもとに刈らず、焼かずに放置するとヨシの枯葉の堆積により土壌の乾燥化が進み、ヨシに酷似したオギやセイタカアワダチソウ、ヨモギ、ツル植物などが繁茂してヨシ群落の勢力は衰えていきます。
さらに近年、拡大阻止のために駆除に取り組んでいるミズヒマワリやナガエツルノゲイトウをはじめ、ヨシの株元を覆い尽くすオオフサモ、チクゴスズメノヒエ、ホテイアオイなど、外来植物も脅威となってきました。

『ヨシに酷似しているオギ』

【次の世代に】

様々な困難を経て今に生きるヨシ群落の保全には、里山の保全と同様に刈り採りによる生育環境の維持と、豊かな生物相の生息空間を手つかずのまま残すことも重要です。
また、琵琶湖の美しい風景を眺めるだけでなく、一人でも多くの人に身近にある滋賀の自然やヨシについて知ってもらい、時には湿地へ足を運ぶことをお奨めします。
様々な形でヨシと関わることにより、私たちに託された貴重なヨシ群落とのつきあい方が見えてくることでしょう。

ネットワーク広場

㈱パナホーム滋賀
高屋 佳典さま より

「植樹祭」 びわこ地球市民の森づくり

みんなの思いやりで豊かな森を・・・・
～滋賀県の自然を守るため苗木の植樹活動～

私たち㈱パナホーム滋賀は、「母なる湖　ー琵琶湖ー」を中心としたこの自然に恵まれた滋賀県を大切に守って行きたいと考えております。その中で、滋賀県が取り組んでおられる「びわこ地球市民の森づくり」に大変共感し、「エコライフ基金」を創設いたしました。この基金はパナホームに携わる皆様が、環境を大切にする気持ちを持ち続け、滋賀県に豊かな森を育てるための苗木を植える基金です。

植樹祭のようす

【パナホーム滋賀の植樹活動】

弊社の植樹活動としては、2003年11月に660本の苗木を植えてから今年の春で累計11，467本となり、はじめに植えた苗木もずいぶん大きく成長しました。毎年、春と秋の年2回、お施主様や関係者さんと共に社員全員で植樹活動を続けております。
これまでに参加いただいた皆様の苗木が、やがて緑豊かな森になることを楽しみに、大切に育んで行きたいと願っています。
　詳しくは、「パナホーム滋賀」ホームページを覗いてみて下さい。↓
http://panashiga.jp/green

※ 他にも実際の活動を通して元気や学びをいただいている取組みが多くあります。

◇ 「パナカップ」 守山市の少年野球大会への協賛
◇ 社会福祉法人蒲生野会　あかね寮さんでの模擬店のお手伝い
◇ 児童養護施設さんとのふれあい活動
◇ 滋賀県社会福祉協議会　施設ボランティアに体験参加
◇ クリーンデイ「清掃活動」

㈱パナホーム滋賀のおもい・・・・
～活動は公器としての使命と一人一人の学びの場～

パナソニックグループの一員としての誇りをもち、社会の公器としての使命を全うすること、またその活動を通じて私たち一人一人が学ばせていただき成長できればと考えています。
私たちはこれからも、いろいろな環境保全活動や地域貢献活動を継続して行きます。

春の伊庭内湖では・・・

みなさん、『ノウルシ』という植物をご存じですか？
環境省のレッドデータブックでは、絶滅危惧Ⅱ類に分類され絶滅が心配される植物だそうです。
「特集」でお世話になった森 小夜子さんから「伊庭内湖周辺にノウルシが咲いているから一度見に行ってはー！」と情報をいただき、早速カメラを手に伊庭内湖へ・・・・
5月の初旬ごろでした。教えていただいた場所に行くと、芽吹き始めたヨシ原に黄色の花が一面に広がっており、ちょうど満開の時期でした。
森さんによると“大変貴重な植物で、伊庭内湖で自生しているのは珍しい”ことだそうです。

※※　茎を切ると出る乳液が肌につくと“かぶれる”ことから
この名が付いているそうです。

伊庭内湖のノウルシ

外来魚釣り大会は・・・

開会式のようす

5月22日（日）の伊庭内湖外来魚釣り大会は悪天のため中止となってしまいました。
朝から、どんよりとした厚い雲がかかる日でした。天気を心配しながら準備作業を終え開会式が行なわれたのですが、
30分もしないうちに、猛烈な雨と、おまけに強風が吹き出し
やむなく中止のアナウンスが・・・・
スタッフ一同くやしい思いをしながら撤収です。
お手伝いに集まっていただいた皆様、参加を楽しみにしていただいた皆様、自然には勝てませんでした。残念です。　次の機会をお楽しみに

お手伝いいただいたネットワークの皆さん

びわ湖を知る■解答

① 23内湖
明治から昭和の初めまでは、びわ湖の周辺には大小40数個の内湖が広がっていました。

編集後記

今年は早々と梅雨入りしてしまい、毎日うっとうしい日が続いています。でも、こういう時期があることがびわ湖や生き物すべてにとって恵みの雨となっているのだと考えてみると少し心が晴れるのでは・・・

「琵琶湖周辺のヨシ原について」では、なかなか見ることの出来ない貴重な植物をご紹介いただきました。ヨシ原（湿地）のなかで上手く共存している植物のすがた、人による手入れの必要性や手つかずの自然を残す事ことの大切さを学ばせていただきました。
みなさんも、春から夏のびわ湖の湿地へ足を運んでみてはいかがでしょか。（T・O）